

私はコッコロ
女神アメス様より
主さまのお世話を
任じられております

美食殿での生活も長く
皆さまとの絆も
深まってきており

特に主さまとは…

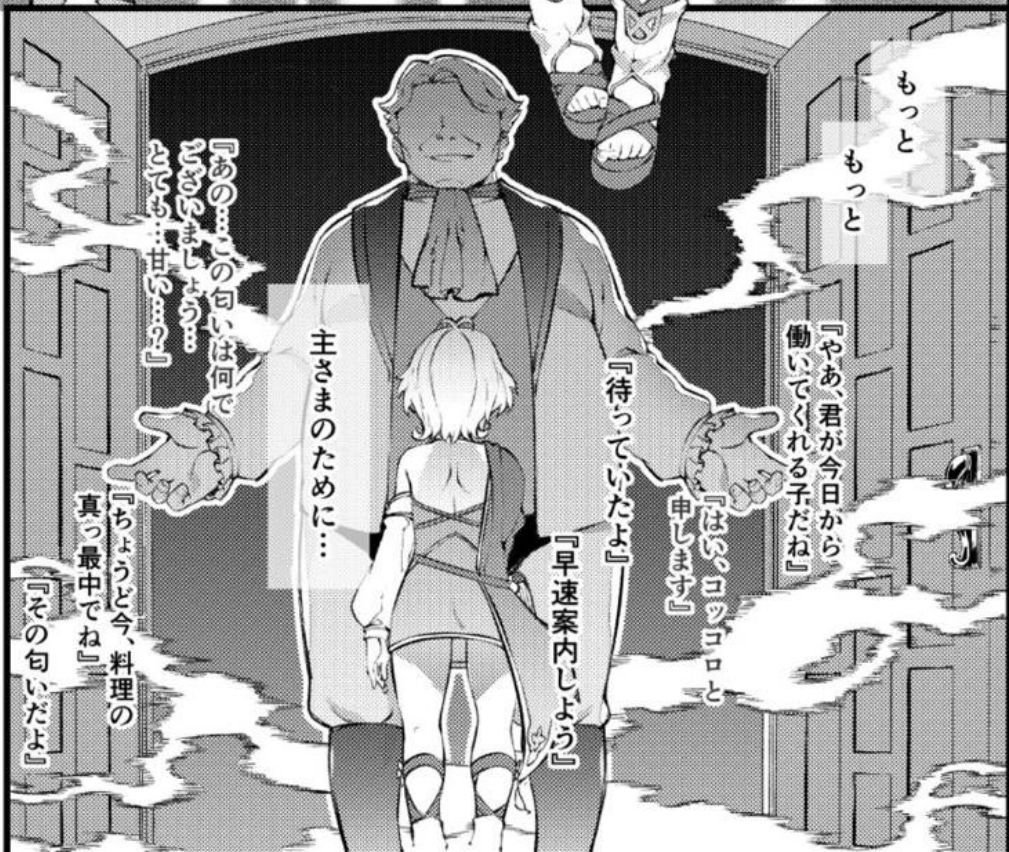
昨晚の夜も…

沢山のキスを
していただきました

もう幸せで幸せで…

この先も主さまと
ずっとずうっと
歩いていきたい…

だからコッコロは
頑張ります！



「やあ、お目覚めかい」

「言っただろう？」

「とても良い食材が
手に入ったとね」

「それは君のことだよ
コッコロ君」

「私も美食家でねえ」

「君のような
育ち盛りの子を
頂くのが
大好きなんだ」

「特に成熟しきっていない
果実を食すのが
至上の喜びでね」

「う…動けない…力が…」

「まさかあの香りは…」

「その通り、牝を痺れさせ、
快楽を与えてくれる…
いわば媚薬だ」

「私のはとても
大きいからねえ」

「だが時期に
気持ちよくなる」

「ひっ!!」

「では頂くでしょう」

「まだ熟していない
極上の果実」

「おやめください!!」

「入るわけが…!!」

「ククツツのピツタリ
閉じて拒んでいる割れ目」

「フン!!」

「だ…めっ…っ!!」

「裂け…」

「これを待ち望んで
いたのだよ!!」

「ぬおおっ!!」

「あ…あっ」

『ヌウウウンっ!!』

『あああああ…っ!!』

『素晴らしい!!』

『実に素晴らしい
締め付けた!』

『…そんな…』

『初めては…
主さまに…』

『心配せずとも、
これからは私が
君の主だ』

『いや…いやで
ございま…す…!!』

『ククク、いいぞ』

『抵抗する意思と
肉棒を押し出そうとする
肉壺、どちらも
イキがよい!』

『くる…し…っ!!』

『主…さま…っ!!』

『少し早いが奥も
ほぐさねばな!』

『あ…っ…やあ…!!』



「フン...!!」

「フンフン...!!」

「...やああつ!!」

「フン...!!」

「あ...あ...あ...あ...!!」

「私の剛直をここまで加えこんでくれるとは実に素晴らしい!」



「声もいやらしくなってきた。媚薬が効き始めて来た頃か」

「フン...!!」

この感覚、怖い...のです
主...さまあ...!!

「そんな...こと...?」
あああ...
何かが...
昇ってきて...



苦しい...アソコが...
私の中が引...張り
出されて
しまいそうです...

それなのに...
突かれるたびに、
どんどん熱くなってる!

「わかるだろう?
子袋の入り口を
さじ開けて
いるのが!」

「ここが、牝の一番
美味なところ
なのだよ!」

「なら君の子袋はもう
私の子種を受け入れる
準備ができている頃だ」

「たっぷり
射精させて
もらおうじゃないか」

「君に使うた媚薬は
協力だね」

「今ごろ、君のように
未熟で無防備な卵が
子袋に向かっている
ころだろうよ」

「お待ちくださいー」

「それだけは…!!
それだけは
ゆるしてください
ませっ!!」

「言っただろう
君を孕ませると!!」

「だめっ!!」

「なら、今から私が君の主だ!!
安心して受け取りたまえ!!」

「新しい『主』の子種をなっ!!」

「お嬢様もさあ」

「お嬢様もさあ」





『とりあえず続きと
行こうじゃないか』

『君の子袋は
どれくらいで
堕ちるかねえ？』

『楽しみだよ』

『くおおおっ 孕めっ!!』

『孕めえっ!!』

『あっ!!』

『あああっ!!』

『ふう、たっぷり
受け止めてくれたねえ』

私の中に…
…熱いものが
一気に流れてきて…っ!!

『でもまだ始まったばかり』

『ハハハハハっ!!』



—その後も—

私は犯され続けました…

何度も…

主様に捧げるはずだった
大事なアソコに

あの黒くて
太いモノが
入ってきて…

何度も…

おびただしい量の
子種を私の膣内に
放って来たのです

はー♡

はー♡

ん

ん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん



——どれくらい時間が経ったのでしょうか——

私の体はとっくに限界を迎え

指を動かすこともできないほどになっておりました

ですが男は反応のなくなった私を持ち上げ

勢いよくアソコにおちんちんを叩きつけてきたのです

赤ちゃんの部屋の入り口を打ち付ける衝撃と快楽に

私は堪らず叫び声を上げるしかありませんでした

そして私の赤ちゃんの部屋はこじ開けられ：



受け止めきれないほどの
子種を吐き出してきたのです

薄れていく意識の中…

赤ちゃんの部屋の
奥にある大事な
ものが…

主様以外の子種に
包まれていく恐怖に
怯えながら
意識を手放しました…



そして

『孕め!!』



主様の「子種」を
受け入れるはずだった
ソコには

激しい行為で
醜くめくれた「膣肉」と

常にお腹が
膨らむほど注がれた
大量の「別の子種」:

この数日間
私のアソコに
子種が入ってない
時間は存在して
おりませんでした

「孕んだ」と

こんな汚れ切った体では
主様のもとに戻れない...

そう諦めたとき:
下腹がチクリと
痛んだのを感じたのです...

ロッコロは...
もう...

